

茨城県総合計画

茨城チャレンジプラン（仮称）

～ 挑戦する茨城 ～

（案）

第 1 部

将 来 構 想

【趣 旨】

将来構想は、本県を取り巻く環境の変化や本県の発展可能性などを踏まえて、概ね2050年頃を展望した新しい茨城づくりのグランドデザインを示したものです。

【構 成】

本県を取り巻く環境の変化や本県の発展可能性を示す『時代の潮流と茨城のポテンシャル』、本県の人口の見通しを示す『人口の展望』、基本理念や目指すべき将来像を示す『茨城の将来像』の3つの章で構成しています。

第1章 時代の潮流と茨城のポテンシャル

第1項 時代の潮流（「新しい茨城」づくりに向けて留意すべき重要な視点）

第1節 未曾有の人口減少や超高齢社会の到来

我が国の総人口は、2008年をピークに減少局面に入り、2050年には約1億200万人に減少し、生産年齢人口は、2015年の約7,730万人から、約5,280万人に減少する一方、総人口に占める高齢者の割合は、2015年の約27%から、約38%に増加すると見込まれています。（国立社会保障・人口問題研究所の中位推計）

また、2017年には、東京圏で約12万人の転入超過を記録するなど、若年層を中心に人口の東京一極集中の傾向が続いています。

人口減少や超高齢社会の到来は、経済活動の縮小、地域コミュニティの崩壊、社会生活基盤の劣化など、様々な影響を及ぼすことが懸念されており、国を挙げて地方創生の取り組みが進められています。

本県においても、人口減少が待ったなしで進行する中、人口減少対策にどのように取り組むかによって、未来が大きく方向づけられる重要な転換期を迎えており、地方創生をより一層加速させる必要があります。

第2節 社会経済のグローバル化の進展

グローバル化の進展により様々な分野における国際競争が激化しており、私たちの生活においても大きな影響が生じております。

また、2018年3月には、我が国を含め11カ国がCPTPP（環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定）に署名し、約5億人の新たな経済圏が誕生しようとしています。

このような状況の下、国内においては、堅調に増加する訪日外国人によるインバウンド消費が拡大するとともに、増大する海外需要を背景とした輸出の拡大や海外進出などにより、経済活動の収益基盤拡大が図られています。一方で、生産年齢人口の減少に伴う労働力不足を補うため、外国人労働者の急増も見られる状況となっております。

本県においても、成長著しいアジアをはじめとした海外の需要を積極的に取り込んでいくため、県内事業者の海外販路の拡大や海外進出の支援、外国人観光客の誘客プロモーションなどに取り組むとともに、外国人研究者や実習生などの海外人材が活躍しやすい環境づくりやダイバーシティ社会の構築、グローバル社会で活躍する人材育成などを進め、ヒト、モノ、カネ、情報の交流を拡大し、世界に飛躍する茨城を実現していくことが必要です。

第3節 Society5.0¹の実現への挑戦

国においては、AI、ビッグデータ、IoT等の第4次産業革命の社会実装によって現場のデジタル化と生産性向上を徹底的に進め、日本の強みとリソースを最大活用して、人口減少・高齢化、エネルギー・環境制約など様々な社会課題の解決を目指す「Society5.0」を実現するとしています。

本県においても、少子高齢化・人口減少社会を克服し、県民生活をより豊かにしていくため、第4次産業革命のイノベーションを創出する環境の整備を行うとともに、あらゆる産業や社会生活に積極的かつ最大限に取り入れていく必要があります。

第4節 インフラの老朽化と大規模災害への備え

我が国では、高度成長期以降に大量に整備されたインフラの老朽化が進んできていることから、安全を確保するために適切な維持管理・更新を行うことが必要となっています。今後、対策費用の増加が見込まれることから、トータルコストを中長期的に縮減・平準化を図るなど計画的な取組が必要です。

また、首都直下地震や南海トラフなどの巨大地震発生の切迫性が指摘され、大規模火山噴火や、地球温暖化に伴い激甚化する恐れがある風水害や土砂災害など、大規模自然災害への対応が大きな課題となっています。

そのため国は、平成25年にインフラ長寿命化基本計画を決定し、全てのインフラを対象にした今後の取組を示し、平成27年に国土形成計画を変更し、首都直下地震等の切迫性の課題を踏まえ東京一極集中の是正に取り組むこととしています。

本県においても、東日本大震災をはじめとした過去の災害から得られた教訓を活かし、災害時において、被害の最小化や迅速な回復を図れるように備えるとともに、インフラの予防的な補修や計画的な更新などを進める必要があります。

第5節 働き方改革と人材投資を通じた生涯現役社会への挑戦

国においては、持続的な成長経路の実現に向けて潜在成長率を引き上げるため、人生100年時代を見据え、誰もがいくつになっても活躍することができる社会を構築するため、一人ひとりの人材の質を高める「人づくり革命」に取り組むことや、誰もが生きがいを感じて、いくつになってもその能力を思う存分発揮できる社会を実現するため、働き方改革を推進していくとしています。

本県においても、多様な働き方の実現による持続的な成長に向けて、ワーク・ライフ・バランスの推進や女性が働きやすい環境の整備、日本一子どもを産み育てやすい県づくりを進めるなど、人材への投資を積極的に行っていく必要があります。

¹ 狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く新たな社会を指すもので、第5期科学技術基本計画において我が国が目指すべき未来社会の姿として初めて提唱。

サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会。

第6節 持続可能な開発目標（SDGs）に向けた取組の加速化

2015年に国連サミットにおいて採択されたSDGsは、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指し、経済、社会及び環境をめぐる広範な課題に対して統合的に取り組むこととしております。

我が国においては、「あらゆる人々の活躍の推進」や「健康長寿の達成」、「成長市場の創出、地域活性化、科学技術イノベーション」など8つの優先課題を掲げ、「持続可能で強靱、そして誰一人取り残さない、経済、社会、環境の統合的向上が実現された未来への先駆者を目ざす」こととしております。

こうした理念は、グローバル社会の中で大きく飛躍を目指す本県にとっても重要な視点であるため、国とともにSDGsの達成に向けた取組を加速化していく必要があります。



SDGsのアイコン

第7節 大規模イベントの開催

(世界湖沼会議, G20, 茨城国体, 東京オリンピック・パラリンピック)

本県では、2018年10月に「人と湖沼の共生—持続可能な生態系サービスを目指して—」をテーマに、23年ぶり2回目となる第17回世界湖沼会議が開催され、国内外の研究者や行政担当者、企業、市民など様々な分野の参加者が集まり世界の湖沼及び湖沼流域でおきる環境問題についての意見交換が行われます

また、2019年6月には、G20サミットに併せて貿易・デジタル経済大臣会合が開催されるほか、本県で45年ぶりとなる国体「いきいき茨城ゆめ国体2019」と本県初となる全国障害者スポーツ大会「いきいき茨城ゆめ大会2019」が開催され、県内全市町村において競技が行われます。

さらに、2020年には、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催され、本県においても、茨城カシマスタジアムがサッカー競技の会場となるとともに、複数の国が事前キャンプ地として予定しております。

こうした全国的・世界的ビッグイベント開催を最大限に活かしていくためには、開催期間中だけでなく、開催後においても持続的に交流の拡大や地域活性化に繋がるような取組を進めていくことが必要です。



世界湖沼会議



翔べ 羽ばたけ そして未来へ

活躍が期待される本県チーム



G20貿易・デジタル経済大臣会合



茨城カシマスタジアム

第2項 茨城のポテンシャル

第1節 豊かな自然と住みよい環境

本県は、関東地方の北東部に位置し、政治・経済の中心地で大消費地でもある東京からおよそ35～160km圏と近接しています。県北地域は、阿武隈・八溝山系の山々が連なるとともに、変化に富んだ海岸線など優れた自然景観を有しており、県央から県南西地域にかけての地域は、肥沃な平地が広がる豊かな穀倉地帯となっているほか、筑波山や全国第2位の面積を有する霞ヶ浦、ラムサール条約登録湿地である涸沼など、水と緑に恵まれた多彩な県土を形成しています。「常陸国風土記」においても、「土地が広く、海山の産物も多く、人々は豊かに暮らし、まるで常世の国（理想郷）のようだ」と、常陸国（現在の本県）の素晴らしさが述べられています。

このような本県は、全国第4位の可住地面積を有し、気候も温和で自然災害が少なく、ゆとりある居住環境を備えており、都市的な生活と自然の豊かさを享受できる、暮らしやすい環境にあります。



霞ヶ浦の帆引き船

第2節 世界に誇る科学技術や高度なものづくり産業等の集積

本県の平成29年の工場立地の状況は、県外企業立地件数で全国1位となっており、過去10年間を見ても、立地面積が1,010ヘクタール、県外企業立地件数が291件と、いずれも他県を大きく引き離して全国第1位となっています。

また、東海地区には、大強度陽子加速器施設「J-PARC」をはじめ、原子力関係の研究機関が集積しているほか、つくば地区には、29の国等の研究・教育機関が立地するなど、最先端科学技術の集積が図られています。

特に平成23年12月に国際戦略総合特区に指定された、つくば市を中心とする区域においては、次世代がん治療法（BNCT）の開発、生活支援ロボットや化石燃料にかわる藻類バイオマスエネルギーの実用化など、ライフイノベーション、グリーンイノベーションの分野において、我が国の成長発展に貢献する9つのプロジェクトが進んでいます。

さらに、日立地区には高度なものづくり産業が、また、鹿島地区には鉄鋼・石油化学などの素材産業が集積し、平成28年の製造品出荷額等は全国第8位となっています。

こうした科学技術や産業の集積を最大限に活用して、医療・ロボットやバイオ・ナノテクなど、今後成長が見込まれ経済的波及効果の大きい分野を中心に、国際競争力のある新技術・新製品の開発が進んでいます。



HAL®医療用下肢タイプ
(出展：CYBERDYNE株式会社)

第3節 全国をリードする農林水産業

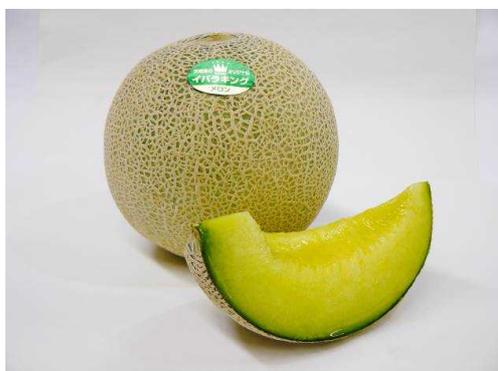
本県は、広大で肥沃な農地，黒潮と親潮が交錯する豊かな海，首都圏に位置する地理的優位性などの強みを背景に，県内各地で品質に優れた農林水産物が豊富に生産されており，農業産出額が平成28年まで9年連続で全国第2位，水産物の海面漁獲量が全国第3位（平成28年）であるほか，産出額が全国1～3位の農産物が28品目（平成28年）あるなど，「食材の宝庫」として日本の食料マーケットを支えています。

このような中，ICTやロボット等を活用した生産性の高いスマート農業の推進や，メロンの「イバラキング」，イチゴの「いばらキッス」，なしの「恵水」，水稻の「ふくまる」，種豚の「ローズD-1」など県オリジナル品種の開発が進んでおり，これらを活用した産地づくりや新たな販路開拓，ブランド化の取組が活発化しています。

また，農家自身が生産のみならず加工や販売にも取り組む6次産業化が進んでいるほか，県民が積極的に県産農林水産物を消費することで農林漁業者を応援する「茨城をたべよう運動」を展開しています。

さらに，生産者をはじめ，関係団体，ジェトロや商社などの連携による輸出の取組も進展しており，「常陸牛」や「米」，「青果物」，「水産物」などについて，東南アジアや北米などにも販路が広がっています。

このように，豊富な農林水産物の更なる付加価値向上や販路拡大など，国際競争力の高い儲かる農業の実現を目指す取組が進展しています。



イバラキング



いばらキッス



恵水



ふくまる

第4節 発展を支える広域交通ネットワーク

<高速道路>

常磐自動車道が県土を南北に縦貫し、北関東3県の主要都市と茨城港常陸那珂港区を結ぶ北関東自動車道が東西に横断しているほか、首都圏中央連絡自動車道が県南・県西地域を横断し、本県の道路ネットワークの大動脈となっています。

首都圏中央連絡自動車道については、現在、暫定2車線で供用されていますが、国より2024年までに全線4車線化する見通しが示されており、さらなる企業立地の促進や広域的な交流の拡大が期待されています。

また、鹿行地域を南北に縦断する東関東自動車道水戸線について、平成30年2月に鉾田IC～茨城空港北IC間が開通し、未開通の潮来IC～鉾田IC間についても早期の開通が期待されています。

<鉄道>

南北の幹線となる常磐線のほか、水戸駅を起点として、県西地域には水戸線、県北山間地域には水郡線、鹿行地域には大洗鹿島線が運行されており、常磐線については、平成27年3月に開業した上野東京ラインにより東京駅、品川駅まで乗り入れ、利便性が高まっています。

また、つくばエクスプレスについては、東京や県内への延伸が期待されています。

<港湾>

平成20年12月に県北三港統合により誕生した茨城港（日立港区、常陸那珂港区、大洗港区）、平成23年5月に国際バルク戦略港湾に選定された鹿島港の2つの重要港湾があり、首都圏の物流拠点として貨物の取扱いが増加しています。

<空港>

平成22年3月に開港した茨城空港は、国際線が週6便の上海便、国内線が札幌、神戸、福岡、那覇への定期便が就航するとともに、国内外との様々なチャーター便が運航されるなど首都圏の航空需要の一翼を担っています。

さらに、空港ターミナルビルは、来場者数が平成30年4月に1,000万人を突破するなど、地域の交流と活性化の拠点となっています。

今後、北関東自動車道をはじめとした4本の高速道路及び2つの重点港湾、空港など、陸・海・空の広域交通ネットワークを活用して、県内と国内外との結びつきが一層強まることにより、物流や観光、文化など様々な分野における交流が一層促進されるものと期待されています。

第5節 魅力あふれる地域資源

本県は、日本三名瀑の一つである「袋田の滝」や万葉集にも歌われる「筑波山」など豊かな自然景観を有しております。

また、東日本で唯一今に伝わる「常陸国風土記」や、水戸藩による「大日本史」編さん事業、日本遺産に認定された藩校「弘道館」、日本三名園の一つに数えられる「偕楽園」など長い歴史と文化を有しており、明治維新の礎ともいわれる水戸学に代表されるように、学問や文化の振興が全国に先駆けて行われてきました。

さらに、「結城紬」、「笠間焼」、「真壁石燈籠」などの伝統的工芸品のほか、「綱火」、「日立風流物」、「常陸大津の御船祭」などの無形民俗文化財が国から指定されるなど、豊かな伝統文化が今なお息づいています。

近年においては、「国営ひたち海浜公園」の見晴らしの丘一面に咲くネモフィラの景観が国内外から評価されるほか、高さ120mで世界最大となる青銅製立像「牛久大仏」の雄大な景観などを目的に海外からの旅行客を中心に観光客の増加が見られます。

また、本県の長大な海岸線を活かしたサーフィンなどのマリンスポーツのほか、高さ100mで日本一の「竜神大吊橋のバンジージャンプ」、日本一のサイクリング環境を目指す全長約180kmの「つくば霞ヶ浦りんりんロード」、県北地域などの自然環境を活かした「トレイルランニング」など、新たなアクティビティが育ちつつあります。

さらに、サッカー・Jリーグの「鹿島アントラーズ」・「水戸ホーリーホック」や、バスケットボール・Bリーグの「茨城ロボッツ」などのプロスポーツ、国営ひたち海浜公園における日本有数のロック・フェスティバルの開催、日本3大花火競技大会に数えられる「土浦全国花火競技大会」や各地域の祭り、日本一のサメの飼育種数を誇る「アクアワールド・大洗」など、県内には多様なエンターテインメントがあります。

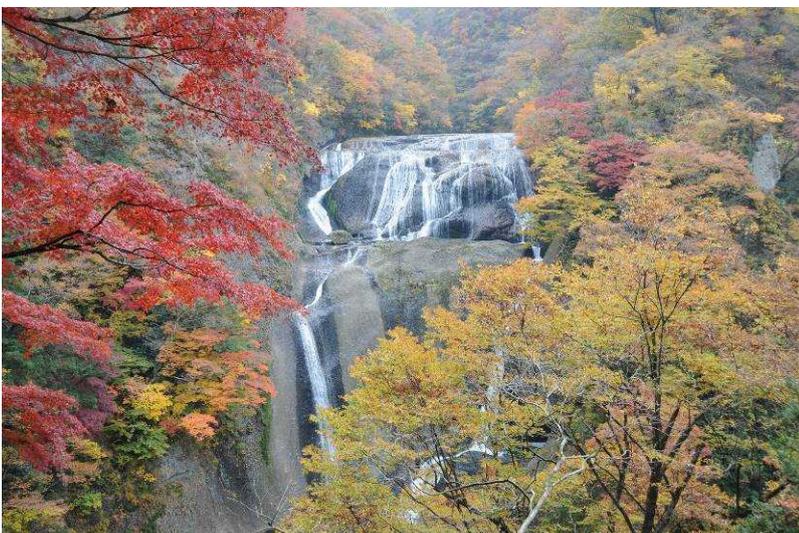
これら先人から引き継いだ自然、歴史、芸術、伝統文化や、近年育ちつつある観光地、アクティビティ、エンターテインメントなど、多様で魅力あふれる地域資源を発見・理解し、磨き上げ、効果的・積極的に発信することにより、地域の魅力が国内外に広く評価されることが期待されます。



竜神大吊橋のバンジージャンプ



つくば霞ヶ浦りんりんロード



袋田の滝

第2章 人口の展望

我が国は、かつて人類が経験したことのない未曾有の人口減少・超高齢社会に直面しており、社会全体の活力の低下が大きな問題となっています。

一方では、第4次産業革命と呼ばれる劇的な情報通信技術の進歩やグローバル化の進展など社会経済情勢が大きく変動しており、時代の大きな転換点を迎えています。

このような中で、「活力があり、県民が日本一幸せな県」を実現するためには、本県の強みを最大限に活用し、力強い産業の創出や質の高い雇用の確保などを通じて定住人口を確保するとともに、交流人口や関係人口の拡大を図ることが必要です。

ここでは、本県の将来の姿について、人口の視点から展望します。

【茨城県の人口の展望】

本県の人口は、2000年の299万人を頂点として、2010年には297万人、2015年は292万人と減少を続けています。特に、2011年の東日本大震災以降は、少子高齢化に伴う自然減の増大に加え、震災前には増加へ転じた社会増減についても、震災後は大幅な社会減となりました。近年は、社会増の傾向も見られますが、自然減の進展により、年間約9千人を超える人口減少となっています。

このような中で、国においては、2014年12月に「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」を策定し、2060年に約1億人の人口を維持する将来展望を示したところであり、これを基に本県においても2015年10月に「茨城県人口ビジョン」を策定し、住民の希望を踏まえた人口の将来展望を示したところです。

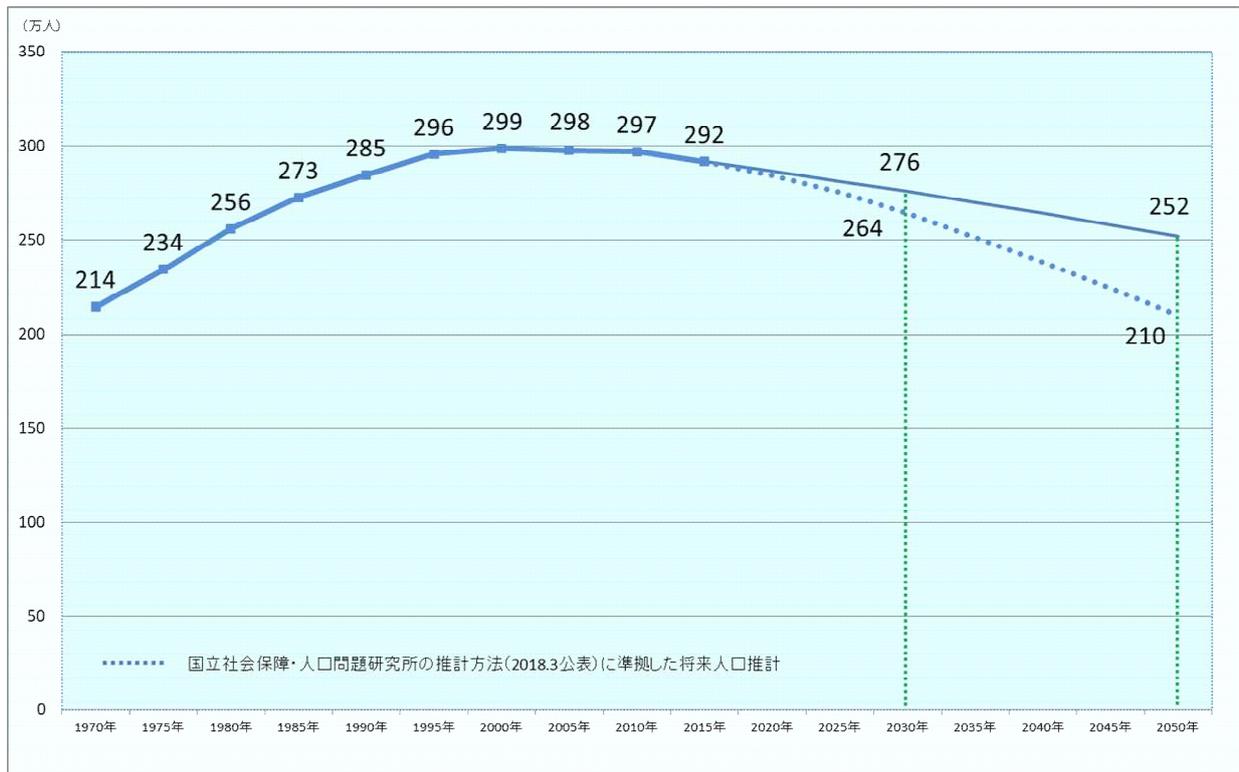
「茨城県人口ビジョン」では、合計特殊出生率が国の「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」と同様の水準に上昇することを基本に、移動率がU I Jターンや地元就職の希望を満たした水準まで上昇した場合の人口見通しを示しています。

それによれば、若い世代の経済的安定を図るなど住民の結婚・出産・子育てに関する希望を満たすための施策とともに、企業誘致による働く場の確保など本県へのU I Jターンや地元就職の希望を満たすための施策を講じることにより、本県の人口は、2030年には276万人程度になるものと見込まれます。

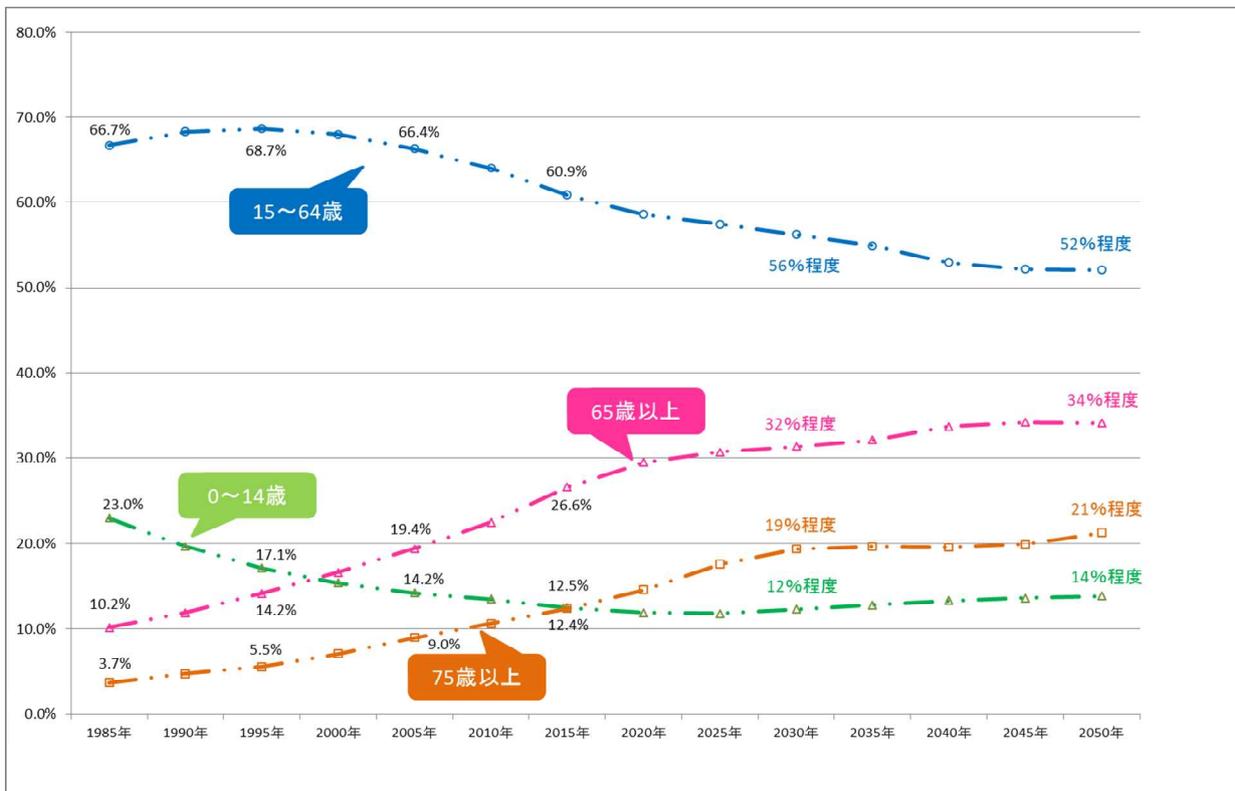
さらに、2050年には252万人程度となり、2018年3月に国立社会保障・人口問題研究所が推計した方法に準拠した将来人口推計の210万人を42万人程度上回ることとなります。

人口構成については、2030年には高齢者人口の割合が32%程度にまで上昇し、2050年には、生産年齢人口の割合は52%程度に低下する一方で、高齢者人口の割合は34%程度にまで上昇し、そのうち75歳以上が21%程度を占めることとなりますが、出生率の上昇により年少人口の割合は14%程度に回復することとなります。

【茨城県の人口の実績と見通し】



【人口構成の見通し】



出典：2010年以前は「国勢調査」、2015年以降は「茨城県人口ビジョン」（パターン②の値を表示）。

第3章 茨城の将来像

「新しい茨城」づくりを進めていくためには、目指すべき「新しい茨城」の姿を県民の皆様と共有し、そこに向けて県民の総力を挙げて取り組んでいくことが必要です。

ここでは、そのような考えのもと、総合計画における『基本理念』及び『茨城のランドデザイン』を示します。

第1項 基本理念

基本理念

『 活力があり，県民が日本一幸せな県 』

- 人口減少時代を迎える中でも、県民一人ひとりが本県の輝く未来を信じ、「茨城に住みたい、住み続けたい」人が大いに増えるような、「活力があり，県民が日本一幸せな県」の実現に挑戦します。

急速に人口減少や少子高齢化が進行する中、社会経済のグローバル化や、インターネットを活用した様々なビジネス、人工知能の劇的な進歩など、将来の予測が難しく、混沌とした時代を迎えています。

こうした時代の変化に的確に対応し、これからの茨城を切り開いていくためには、本県の持つポテンシャルを最大限に活かし、茨城のあるべき姿を見据え、これまでの常識にとらわれず、新たな発想で果敢に挑戦していかなければなりません。

県民の皆様が、未来に希望を持つことができ、自由で新しい発想のもと、自身のかなえたい夢に向かって挑戦を続けられることが、県民が日本一幸せな県につながっていくものと考えます。

このような考えのもと、人口減少時代を迎える中でも、県民一人ひとりが本県の輝く未来を信じ、「茨城に住みたい、住み続けたい」人が大いに増えるような、『活力があり，県民が日本一幸せな県』の実現を基本理念とし、県民とともに「新しい茨城」づくりに挑戦していきます。

第2項 茨城のグランドデザイン

2050年頃には、第4次産業革命や人口減少などの進展により、ライフスタイルや社会の価値観が大きく変化していることが予想されます。

そうした中、県民とともに様々なチャレンジに果敢に取り組んだ茨城県は、社会の大きな変化に適応し、産業の発展や安心安全で質の高い暮らしをもとに、県民の皆様が、未来に希望を持つことができ、自身のかなえたい夢に向かって挑戦を続けられる、『活力があり、県民が日本一幸せな県』となっています。

(1) 茨城の将来像(2050年頃)

<多様な地域の強みと高付加価値化がもたらす強い“産業”>

- 発達した広域交通ネットワークや、科学技術・ものづくり産業・農業といった本県の強みの磨き上げに成功するとともに、I o TやA Iなど革新的技術が産業・社会に浸透し、中小企業や地域経済を支える商業・サービス業など本県産業の競争力が強化されています。
- 観光や高付加価値な県産品などにより茨城ブランドが確立されるとともに、茨城の魅力が国内外に広く発信され、世界中で茨城の存在感が高まっています。
- リニア中央新幹線の開通により三大都市圏の連携（スーパー・メガリージョンの形成）や、つくばと関西の知の創発拠点をつなぐ「ナレッジ・リンク」の形成などによりイノベーションが促進され、成長分野の新技术・新産業の創出と新たな産業集積が進み、知的産業クラスターが形成され、未来を切り拓く発展を果たすことで日本の成長を牽引し、ひいては世界の発展にも貢献しています。

<挑戦し、地域を支え、一人ひとりが尊重される“人”>

- 自由で新しい発想のもと、自身のかなえたい夢に向かって挑戦してきた“茨城そだち”の人財が、各界でリーダーとして、または地域社会やグローバル社会において多数活躍しています。
- 郷土に愛着と誇りを持つ県民が増えるとともに、地域の様々な課題を自ら解決する豊富な知識と、住民同士のコミュニケーションを良好に機能させる能力などを身に付けた人財が、住民自治を担い、地域をしっかりと支えています。
- 一人ひとりが尊重され、国籍、民族、性別、年齢などに関わらず誰もが自分の能力を発揮できる社会が形成されています。

<豊かな自然と温かい地域社会に息づく健康で安心安全な“暮らし”>

- 少子高齢化が一層進展する中でも、医療や福祉を担う逞しい人材が育つとともに、I C Tや生活支援ロボットを活用した新たな医療・福祉サービスの提供や、A Iやビッグデータを活用した精緻な災害予知などの革新的技術が、安心安全で質の高い暮らしを支えています。
- 人口減少社会においても、県民や市町村、企業、大学、N P Oなど多様な主体との連携により、日常生活の利便性の確保や伝統文化の伝承など、地域社会を維持する仕組みや強固な絆が生まれ、豊かな自然環境の中、若者を惹きつける魅力あるまちづくりが進み、持続可能で温かく充実した暮らしが営まれています。

(2) 県土を支える社会基盤

2050年には社会資本の整備が進み、県内外との対流・連携が一層活発化することにより、誰もが『夢・希望』に溢れる生活を送る基盤が整備されています。

<広域交流と経済波及を支える道路・鉄道ネットワークの構築>

○ 東関東自動車道水戸線の開通、首都圏中央連絡自動車道の4車線化により、高規格幹線道路網が完成するとともに、これらを補完する地域高規格道路や主要な幹線道路の整備が進み、広域交流と地域間連携を支える道路ネットワークが構築されています。

○ 東京方面との鉄道等のアクセスの強化により、リニア中央新幹線とのアクセス性が高まり、大阪・名古屋といった三大都市圏等とのネットワークが飛躍的に向上し、経済・学術・文化など様々な分野の交流が活発になっているとともに、有事の際の東京の都市機能のバックアップ等の備えが整っています。

また、公共交通機関や次世代モビリティの発達により県内主要拠点都市間のアクセスが容易になり、県内の連携が強化されるとともに、東京圏などからの経済波及効果が広く県内に及ぼされ、県全体の発展を支えています。

<産業を支え国内外と夢をつなぐ首都圏のニューゲートウェイ>

○ 茨城港では、国内外の様々な地域との航路が充実するとともに港湾と直結する高規格幹線道路網により、県内各地域や北関東地域、さらには首都圏全体と結ばれることにより、コンテナや建設機械、完成自動車などの国際物流拠点としての地位を確立しているほか、LNGの供給基地、あるいはマリンリゾート基地として発展しています。

鹿島港においては、鹿島臨海工業地帯の海上輸送や首都圏の東の玄関口としての物流機能を担う、産業拠点港湾として発展しています。

○ 茨城空港は、全国の主要な地方都市との路線が拡充し、国内を1日で行き来できる環境が整うとともに、アジア諸国など海外との路線も充実しています。また、空港アクセスの向上により、北関東地域、さらには首都圏全体としての空のゲートウェイとして賑わいをみせています。

<県民の命と財産を守る社会資本の整備・長寿命化>

○ 県民の命と財産を守り、安心安全な暮らしを支える社会資本の防災・減災対策が進むとともに、急速に進展する社会資本の老朽化対策については、計画的なメンテナンスにより、施設の長寿命化が図られ、適切な県土基盤の維持・活用がなされています。

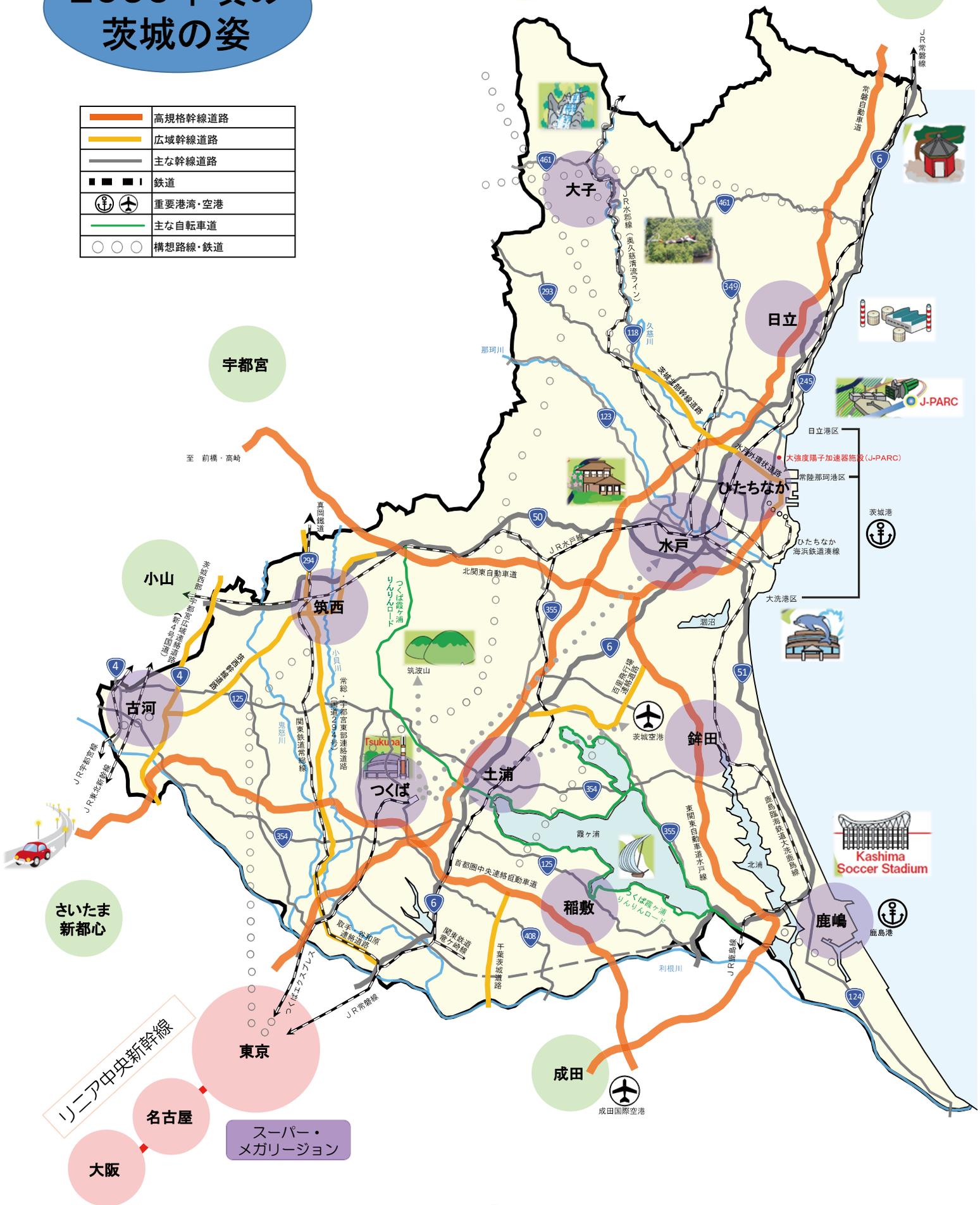
○ これらの陸・海・空の交通ネットワークの整備、維持・活用により、首都圏をはじめ国内外との時間的距離が短縮され、地理的優位性が一層強化されるとともに、県内の多様な個性を持つ広範な地域が相互に連携し、人・モノ・情報が活発に行き交う対流により、本県の強みである科学技術・ものづくり・農業など様々な分野でイノベーションが創出されるとともに、ITなどの成長産業の集積が進み、高付加価値な産業体質への変換が図られ、本県の持続可能な成長を支えています。

2050年頃の 茨城の姿

首都機能移転候補地
(栃木・福島地域)

いわき

	高規格幹線道路
	広域幹線道路
	主な幹線道路
	鉄道
	重要港湾・空港
	主な自転車道
	構想路線・鉄道



2050年の茨城県は、『活力があり、県民が日本一幸せな県』となっています。皆さんは、その頃どのような暮らしが実現していると思いますか？
例えばこんな家族がいるかもしれません・・・

～谷田部家の場合～



長女「みね子」
(高校生)

子育てしながらロボット開発したい！

- 世界的ブランドとなった『MADE IN IBARAKI』のおいもやメロンを使うスイーツが大好き。
- 卒業後は、ロボット研究を進める地元大学へ進学するため、勉強中。
- 将来は、結婚して、子育てをしながらロボット開発をしたい！



弟「すすむ」
(小学生)

世界をリードする会社の社長になりたい！

- 小学校のプログラミングの授業をきっかけに科学技術に興味を示す。
- 地元で相次ぐベンチャー企業の成功を見て、将来は、世界をリードする企業の社長になりたい！



妹「ちよ子」
(中学生)

外国の発展に貢献したい！

- 小学生からの英語教育のおかげで、茨城に多く訪れる外国人観光客と不自由なく会話ができる。
- 将来は、茨城と長年交流が続く東南アジア地域において、その発展に貢献したい！



祖父「しげる」

健康長寿、孫の成長をいつまでも見届けたい！

- 趣味のゴルフやサーフィン、トレイルランニングなど、茨城の豊かな自然を満喫し悠々自適な生活を送る。
- 健康に暮らしているが、いざという時は、遠隔診療により近所で医者に診てもらうことができ、安心安全な生活を送れる茨城で、孫の成長をいつまでも見届けたい！



母「みよ子」

古民家レストランで観光客と交流したい！

- 子育てをするかたわら、高度に自動化された農作業ロボットを駆使して広大な田んぼをほぼ一人で管理する稲作農家。
- 将来は地元食材を使う古民家レストランを開業し、観光客との交流スペースを作りたい！



父「みのる」

世界中で医療・介護に困っている人を助けたい！

- 東京のICT技術を活用した医療・介護機器を扱う企業に勤めるサラリーマン。以前は単身赴任をしていたが、今は県内のサテライトオフィスで働き、家族とともにゆとりを持ち暮らす。
- 茨城の世界最先端技術を活用し、将来は世界中で医療・介護に困っている人を助けたい！